

『正しい理解を』

内閣府が昨年12月、全国で無作為に抽出した15～39歳の男女5千人を対象に「ひきこもり」の調査を実施した。（有効回答率62.3%）

ひきこもりとは学校や仕事に行かず「趣味の用事のときだけ外出する」「近所のコンビニなどにはでかける」「自室からほとんど出ない」といった状態が6カ月以上続く人をひきこもりと定義している。

この調査の結果、回答者の1.57%がひきこもりに該当していて、この数字をもとに全国の人数を推計したところ54万1千人の15～39歳のひきこもりの人がいることになるという。平成22年に行われた前回調査の結果よりも数は減ったということであるが、依然50万人を超える深刻な状況にある。現在ひきこもりの状態にある人の3割超が「7年以上続いている」と答え、長期化が進んでいるという。

ひきこもりの状態となった年齢は「20～24歳」が34.7%で最も多く、前回調査より12.7ポイント上昇。「15～19歳」が5.2ポイント増の30.6%で続いた。

企業や組織の中堅となる「35～39歳」も10.2%と倍増しており、高齢化の実態が浮かび上がった。

就労経験を尋ねたところ、契約社員や派遣社員などの非正規雇用が35.1%で最多。正社員は27.0%。働いた経験がない人は27.0%いたという。

私の知り合いの息子さんの場合は、国立大学卒業後に一流企業といわれる会社に就職したが、会社員となって半年を過ぎる頃から出勤することができなくなり、結局会社を辞めた。その後、実家に戻ってきてからひきこもりの状態が今も続いていて、すでに10年以上たっている。親御さんは会社員となるまで、息子のことで何一つ困ったことはなかったという。小学生の頃から大学に進学するまで成績は優秀で、学校に通っている息子についてまったくといっていいほど悩むことなどなかったそうだ。

しかし、ひきこもりとなってから診察してもらったお医者さんから自閉症との診断がでたという。社会人となってからの対人関係を築くことが大きな壁となったらしい。

ひきこもりになってしまう人たち誰しもが自閉症等の発達障害であるとはいえない。ここでは具体的なデータを持ち合わせていないので、発達障害が起因となってひきこもり

となってしまった人の具体的な割合はわからないが、発達障害が引き金となってひきこもりとなるケースは少なくないように感じる。また、発達障害を抱える人すべてが将来ひきこもりになるとも限らない。大切なことは、早期に何らかの障害をもっているのか否かをわかることである。前述の例のように、成人を迎えてから自閉症と診断されその本人の実態が明らかになったという話は近頃よく聞こえてくる。

障害を抱えた人が世の中に出て周りの環境に馴染めないとか、対人関係がうまくいかないなどが生じた場合、変わり者だとか性格がおかしいなどの誹謗中傷を受けることとなり、本人自身が不幸な状況に陥る。つまり本人の特性が正しく理解されていないため、周りもどう接してよいか戸惑うからである。

発達障害は主として脳の機能に生まれつきの障害があるため、大人になったらいずれ治るというものではない。これまで、発達障害の子をもつ親たちは、世間から随分と冷たい視線を浴びせられてきた。親の育て方がよくないなど子どもの特徴が何かしら親の言動と結びつけられ、無責任で不確かな目で見られてきた。発達障害そのものが正しく理解されてきていなかったのである。

特殊教育から特別支援教育へと障害を抱える子どもへの教育のあり方に理解が深まりつつある今、とても大切なことは、早期に子どもの実態を正しく把握し、適切な教育を施すことである。

発達障害の子が将来、自立して生きていくために特別な配慮を要する教育が欠かせない。